

# 我が青春の遍歴

二十五期生 庄司 裕

当時は、死んでしまいたい程絶望的な出来事も、今思えば、取るに足らぬものであったり、寧ろ、そうなってよかつたとしみじみ思ったりすることは、人生にはしばしば見受けられる。

小生は、茨城県水戸市にある茨城中という県内でも有数の私立中学で学び、卓球という競技に足を踏入れた。そして、努力の甲斐あって、三年の夏に、団体と個人で県下No. 1となることができた。

その後、全国中学生講習会（現在の全国中学大会の前身）にも出場し、当時の世界チャンピオン伊藤繁雄選手はじめ、数多くの一流選手と直に接する機会を得た。特に、伊藤選手には、ドライブの時の手首の使い方が悪いと尻をラケットで軽くたたかれたことを、今でもはっきり覚えていいる。

そうこうして、生活の大半の時間を卓球に費やして、未来のチャンピオンを夢見ていた小生も、高校受験という時期にさしかかった。卓球ばかりやっていた割には、小生の成績は、決して悪い方ではなかった。県下一の進学校M高にも、

当世風にいえば、合格確実圏にいたわけである。しかし、卓球のことしか頭にない小生は、卓球の名門H高を受けることを秘かに決意していた。担任教師はじめ、学年主任までが大騒ぎ(?)をして、小生を説得にかかった。けれども、小生の決意は、硬かった。そんな時、突然、父の東京転勤が決定した。さあ一大事である。都立高受験には、時すでに遅く、先生方は、早慶はじめ数々の有名私立高の募集要項を持って、小生宅を訪問した。その陰で、小生は、卓球レポートの全国高校選手権のトーナメント表を見て、入るべき私立高を捜していた。結局、小生は、卓球の強い早大の高等学院だけを受けることとした。当時、早大に入って卓球をすることが夢であった小生が、降って湧いたこのチャンスに、大きな期待を抱いたのは当然であった。

受験、そして、落第。田舎に一人で下宿しなければならぬ。目前に夢のような御馳走を見た後では、今までの食事はみすぼらしかった。なんとというこの世の地獄、神も仏もあらばこそ……。小生、結局、H高に入學し、卓球は思い通りやれたが、夏までたいした成績もあげられず、下宿の食事の悪さも、夏休みに入ってから、栄養失調気味になってしまい、意気消沈していた。

そんなある日、東京の両親が、都立高の補欠募集の新聞広告を持ってきた。西高である。当時は、東大に百名以上を送込んでいた都立の名門校。しかし、小生には、そんなことは

問題でなく、ただ、卓球界にその名を轟かす荻村伊智朗氏の出身校ということだけで十分だった。夏の暑い盛り、西高の広さと樹々の美しさに唯々驚きながら受験、即日発表の結果、見事合格できたのであった。

西高では、良きライバルに恵まれ、洗練された東京の卓球の中でもまれ、強くなつていった。堀越、高輪等の私立高とも全く互角の戦いをした。そして、一浪して東大に入学し、現在では、卓球部主将として、張切つて日夜卓球に励んでいる。これ以上充実した生活もあるまい、とまで思っている毎日である。もし、あの日、早大学院に合格していたら……と思うと。本当に、落ちてよかつた。

これからも、人生には、数多くの苦しみ、悲しみが、小生を待ち受けていることだろう。しかし、その中のいくつかは、至上の喜びが、姿をかえて、小生を訪れているのかもしれない。いや、すべての苦痛とは、そんなものなのかもしれない。

以上、思いつくままに、青春の思い出を書き記してきました。読み返してみると、かなり意識的な手前味噌の箇所が数々見られ、思わず赤面してしまいますが、一卓球馬鹿の、ある意味では妥協の記録として読んでいただきたいと思ひます。

最後に、西卓会の益々の発展を願つてやまない小生の気持ちを記して、終わりたいします。

## 雑感

二十六期生 刈谷 方俊

私の期間中には、西高の現体育館の完成があり、それに伴う記念行事の一環として、卓球のエキジビション・マッチが行なわれました。これは、荻村先輩にお骨折りいただき、全日本級の田阪さんや、古川さん、女子では山中さん御姉妹を招待して、模範試合をしていただいたものです。後半には、部の近光、庄司両先輩との試合も交え、かなり盛りあがったと記憶しています。

練習の方に話を移しますと、体育館完成前は、廊下に台を縦に四台並べて練習場とし、やはり狭苦しい思いをしました。が、球拾いは楽でした。この時期は、上級生が、技術的にも精神的にも充実し、部全体にもいいムードがあったように思います。事実、上級生を中心として、各大会にもかなりの成績を残しました。例えば、近光先輩は全日本ジュニア、インターハイの代表に、庄司先輩は関東大会の代表になったのです。

新しい体育館に移つてからは、広さに関しては比較的良く